

七 御恩が御恩と知られたら

「施した恩は忘れやうと心がけ、受けた恩は報いやうと心がけよとは先哲の訓言である。けれども仲々それが出来兼ねるのが凡夫のなさげなき。出来かねる位ならよいが兎角反対に出たがるで困る。かけた恵はいつまでも忘れずして、恩にきせたがり、受けた恩は遠の昔に忘れてしまつて侮りたがる。そこで親様は氣が氣ではない。自分ながら愛想のつきた、随分とも厄介な代物である。

恩を知るは徳の初なり。恩を報ぜんとする、先ず恩の何たるかを知らねばならぬ。恩を知るに始中終の三階段がある。

始 成程恩を受けて居るか、仕合者であると思ふ。

中 この大恩報ぜねばならぬと、氣をあせらす。

終 とても報い盡せぬ、恩知らずであると懺悔する。

恩知らずである、徒者であると自覺の出来た時、報い盡せぬ大恩であると恩の底が知れたのである。

大舜は父の瞽叟及び繼母に事へて、孝養至れり盡せりであつた。而して瞽叟は有名な残酷な人、自ら仁人と思つて居た。大舜は擧げて天子にせらるゝ程の大孝者、而も常に父の杖に打たれつゝ、孝養の足らぬ不孝者と思つて居つた。されば時人之を稱して、「瞽叟は大仁人、舜は大不孝者」と云つた。是れ即ち恩を知るの終點に達して、我は不孝者なりとの自覺に入つたのである。今なら郡長、昔は代官と申された御役人が、はじめてその職に就いて、その領内を巡回された。その路すがら、ある山里の小村にさしかゝると、向ふから、ひとりの老人、いたく酒に酔ひ、衣物の襟も合はず、胸毛を風に吹かせながら、千鳥足。横すぢかひに、鼻歌うたひながら、ノコくと歩いて來

る。制すれども聞かばこそ、大道の眞中に仁王立したまゝで動かない。止むを得ず、引き立てゝ来て、よく聞き正して見ると、誰あらう村長といはるゝ男であつた。「これは幸の事、序ながら問ふが、この村の戸數人口はどの位あるか」と、郡長が懇にたづねられると、「戸數は百、人は男女を合はせて六十人ばかりもござりましよう」と答へた。そこで郡長は家が多くて、人があまり少いのを訝かしく思はれ、再び「何故か」と問はれると、村長はぬからず、「人は外にいくらもありますけれども、酒を飲むことを知らぬ奴等は、數へるにも及びますまい」。

「酒呑まぬ人は人でない」とは酒呑みの云ひ草であらうが、酒は呑まずとも人は人に相違ないが、恩知らずこそ眞に人でないのである。怨に報ゆるに徳を以てするといふ教さへあるに、受けた御恩を忘却しては實に申譯がない。特に、大悲の如來様には、久遠劫からの御恩である。「如來大悲の恩徳は、身を粉にしても報ずべし、師主知識の恩徳も、骨をくだきても謝すべし」。雨山に被つた御恩徳、口に適ふた御稱名相續しつゝ、御冥見に恥ぢ入り、「御恩知らずで御座います」の自覺に入らねばならぬ。親鸞聖人は懺悔せられた。

悲しき哉愚禿鸞、愛欲の廣海に沈没し、名利の大山に迷惑して、定聚の數に入ることを慶ばず、眞證の證に近づくことを快しまず。恥づべし、傷む

べし。『教行信證』

殊に血の出るやうなお懺悔ではないか。この心に入りてこそ、眞實に如來の御恩が知られ、報謝の行に進まれるのである。聖人は之と同時に、

慶しい哉、心を弘誓の佛地に樹て、念を難思の法界に流す、ふかく如來の矜哀を知りて、まことに師教の濃厚をあふぐ、慶喜いよくいたり、至孝いよくおもし。

と慶（いひ）ばれてある。